「中日戦争」とは何か？
— 朝鮮語の翻訳に漢字語の翻訳で生じる問題

山田 寛人（本学部非常勤講師）

Ⅰ　はじめに

日本語で書かれた歴史に関する文章を読んでいる途中で、「中日戦争」ということばが突然出てきて非常にとまどったことがある。自分自身の無知によるものと考えて、手元にある『角川日本史辞典』を引いてみても、そのような項目は出てこない。おそらく、このことばを見てとまどうのは私だけではなく、多くの日本語話者[1]も同じようにとまどうだろう。なぜなら、ほとんどの日本語話者は「中日戦争」という名称の戦争について聞いたことがないからである。言い換えれば、そのようなことばは日本語の語彙に存在しないからである。実は、このことばは朝鮮語を日本語に翻訳する際に生じた「ヘンな」訳語のひとつなのである。

翻訳において生じる諸問題については、これまでもさまざまな学問分野で研究されてきている。本稿では、これまで提起されてきた翻訳における諸問題をふまえたうえで、朝鮮語から日本語への翻訳において生じる問題をとりあげたい。その際、大韓民国で出版された歴史関係の文章が日本語に翻訳されたものを主な資料としながら、翻訳で生じる問題の中でも特に漢語に注目して論じる。

朝鮮語と日本語は互いに異言語でありながら、漢字という共通の文字に起源をもつ漢語を多用する。ただし、日本語とは異なり朝鮮語の場合、漢字の訓読みにあたるものは存在せず、音読みにあたるものしか存在しない。本稿で漢語という場合、この音読みの漢字で構成された語をさす。

日本語は漢字仮名混じり文で書かれるが、朝鮮語は表面上、表音文字である朝鮮文字（ハングル）のみで書かれることが多い。しかし、朝鮮文字で書かれている部分も元々漢語である場合が少なくない。たとえば、韓国の中学校の歴史の教科書に出てくる文章のひとつについて、漢語の部分を機械的に漢字で表記すると以下のようになる。

> 經濟 開發 5 箇年 計劃으로 國民들의 所得이 增大되었고, 企業 活動이 旺盛해졌으며, 重化學 工業의 成長이 두드러졌을 뿐만 아니라 輸出도 飛躍的으로 增大되었다
>
> （［국사편찬위원회編 1997：188］を改変）

日本では簡略化されている漢字がそのままである点、分かち書きされている点などにちがいがあるもの

注

1　一般的な文章では「日本人」と表現するかもしれないが、日本語を使用する人は日本人とは限らない、という点を考慮して「日本語話者」という表現を用いた。また、日本語が話せても日本語を読めない人がいることも承知しているが、ここではその問題をひとまず措いて、「日本語使用者」程度の意味として用いる。

の、朝鮮語の知識がまったくなくてもおおよその意味が理解できてしまう。一応、これに対応する日本語の翻訳を示せば以下のとおりである。

> 経済開発５ヵ年計画で国民の所得が増大し、企業活動が盛んになり、重化学工業の成長が際立ったばかりか、輸出も飛躍的に増大した［石渡延男監訳・三橋広夫共訳1998：392］。

原文の「旺盛해졌으며」の部分が「盛んになり」となっているだけで、その他の漢語はまったくそのままの形で翻訳されている。多くの日本語話者は、この日本語の訳文を読んでもほとんど違和感をもたないだろう。

このような漢語の共通性があるために、朝鮮語と日本語が互いに異言語であることを忘れて、漢語をそのまま置きかえて翻訳できたものとしてしまいがちである。上で示したような文の場合には、それほど大きな問題は生じないかもしれないが、歴史に関する用語などにはそれぞれの言語の視点が色濃く反映されているために、そのまま置きかえて翻訳すると意味のズレが生じることもある。しかし、朝鮮語から日本語に翻訳されたものを見ると、そのようなズレを深く認識しているとは思えないものも少なくない。

本稿は、翻訳の際に見落とされやすい上述したような問題点を整理して指摘することを目的とする。なお、翻訳と言っても、誰が誰に対して何の目的で行ったものかによって、何が適切な訳語になるのか、という点でちがいが生じる。本稿では、朝鮮語を知らない日本語話者を対象とした翻訳文を想定して考察する。また、こうした問題に関する体系的な考察は、より幅広い資料や文例の分析にもとづいて行われるべきであるが、本稿は問題の存在を指摘する試論にとどまることをあらかじめ断っておく。

Ⅱ　問題の所在と本稿の構成

「ある言語のＡという語をもう一つの言語のＢという語に置きかえるだけでは正確な翻訳をしたことにはならない」という考え方は、これまでもさまざまな学問分野であつかわれており、いわば常識として定着しているものではあるが、あらためて説明しておく。

言語学で学ぶ重要な言語の性質の一つに「あらゆるものについて、「それ本来の名前」というものはなく、それをどんな名前で呼ぶかは、それぞれの言語の勝手である」という言語記号の恣意性というものがある。ある言語で「イヌ」と呼ぶものを、別の言語では「ドッグ」と呼んだり、「ケ」と呼んだりしても、それはそれぞれの言語の勝手だということである。この恣意性にはもうひとつ重要な側面がある。それは「場面や状況が同じでも、言語によってその概念化のしかたが違っている」というものである。これについては以下の説明で十分だろう。

> たとえば、英語でadd more water to tea（お茶にwaterをつぎたす）という場合、お茶につぎたされるのは、まず間違いなく、日本語で「湯」と呼ぶものであって、「水」と呼ぶものではない。したがって、日本語でこれに対応するのは「お茶に湯をつぎたす」であって、「お茶に水をつぎたす」は日本ではまずありえない状況である。言い換えると、同じ場面なのに、日本語を使うと「水」と「湯」の区別をしなければならないが、英語を使うならそのような区別は不要となる。つまり、日本語の「水」と英語のwaterは同じものをあらわしているとはいえないことになる。「水」のように、そのあらわす対象が一見明確に見える場合でさえ、それぞれの言語がそのあらわす範囲を恣意的に決めていると考えざるをえないわけだ［風間喜代三他　2004：5-6］。

人類学の中には「解釈人類学」という分野があり、「たとえ呼び名では日本語の「家族」に相当するからといって、全世界の「家族」が現代日本社会でいうところの「家族」と同じだととらえるのは非常に危険である」[井上京子1999：33] という認識は基本的なものである。たとえば英語の「family」が日本語の「家族」にそのまま置きかえられるとは言えないということである。「family」があらわす意味の範囲と、「家族」があらわす意味の範囲が完全に一致するはずがないからである。

ヨーロッパ言語から日本語への翻訳について多くの論著のある柳父章も以下のように述べている。

> これはとくに一般の常識と相反するように思われるかもしれないが、「近代」ということばのある用例について、その意味はmodernと同じである、などとは私は考えない。少なくとも無条件にそういう前提をとらない。「近代」とmodernとは、ことばの形が違っているからである。とくに、翻訳語とその原語との間で、この態度は重要である [柳父章　1982：49]。

柳父が「これはとくに一般の常識と相反するように思われるかもしれないが」というように、わざわざ断ってから説明しているところからも、このような認識が一般的な常識にはなっていない、ということがうかがえる。

本稿も以上のような認識をもって論じていく。英語から日本語への翻訳を論じる際には、それぞれの文字表記が異なっているので「water＝水」、「family＝家族」、「modern＝近代」ではない、などと書けば理解しやすいかもしれないが、朝鮮語と日本語の漢語の場合は漢字という同じ文字で表記されているためにわかりにくい。そこで本稿では、漢語を〈　〉内に、その発音を［　］内に表記するというスタイルをとって両者のちがいを示す。発音の表記は、日本語の場合はひらがなで、朝鮮語の場合はカタカナで表記することにする。たとえば、〈学生〉［がくせい］と表記すれば日本語の漢語である「学生」のことを、〈學生〉［ハクセン］と表記すれば朝鮮語の漢語である「學生」のことを示す。

「water＝水」、「family＝家族」、「modern＝近代」ではないという説明を読んで納得しても、「〈學生〉［ハクセン］＝〈学生〉［がくせい］」ではないと言われると首をかしげる人がいるかもしれない。「学生」という日本語の漢語は［がくせい］と発音され「大学などに在籍して、教育を受ける人」(『新明解国語辞典　第六版』) という意味をもつ。同様に朝鮮語では「學生」は［ハクセン］と発音され「学校で勉強する人」(『큰사이스國語辭典』) という意味をもつ。この説明だけだとわかりにくいが、厳密に言えば両者の間には大きなちがいがある。朝鮮語の〈學生〉［ハクセン］は「小学生から大学生まで含めて用いる。呼びかけの言葉としても用いられる」(『朝鮮語辞典』小学館) という点で日本語の〈学生〉［がくせい］が意味するものとは異なる。このように、「ことばのかたちが違って」いれば、どれほど類似した意味を持つように思われても、厳密に言えば意味にちがいがあるのである。もう少しわかりやすい例をあげてみよう。

「愛人」という朝鮮語の漢語は［エイン］と発音され「恋人」という意味になるが、「愛人」という日本語の漢語は［あいじん］と発音され「配偶者がいる人の恋人」というような意味になる。両者は、「恋人」という共通の意味をもってはいるものの、日本語の「愛人」の場合は「その恋人以外に配偶者がいる」という点で意味が異なっている。そのため、〈愛人〉［エイン］を日本語に訳す場合、「愛人」ではなく「恋人」と訳すのが一般的である。

さらに、〈工夫〉［コンブ］という朝鮮語の漢語は「勉強」という意味をもっており、日本語の〈工夫〉［くふう］とはほとんど共通の意味をもたない。〈工夫〉［コンブ］を「工夫」と訳してしまえばまったく意味が通じない。〈工夫〉［コンブ］は普通、「勉強」と訳される。

ところでこのような問題は、漢字という文字を使う言語同士の間にのみ生じると思われがちだが、実は表音文字であるローマ字を使う言語同士の間にも見られる現象である。たとえばフランス語の〈merci〉は［メルシー］と発音され「ありがとう」という意味だが、イタリア語で〈merci〉は［メルチ］と発音され「荷物」という意味になる。このような現象をヨーロッパでは「にせのともだち」と呼んでいるという［山本真弓編　2004：39］。

こうしてみると同じ漢語（同じつづりの語）をそのまま置きかえて異言語に翻訳することのおかしさがよくわかるだろう。こうした問題について植田晃次は「同漢字異義語のみ置きかえて等価のものと錯覚する現象を「漢字の惑わし」と呼ぶことにする」［植田晃次　2002：11］と述べている。「同漢字異義語」と言われているように、ここで問題となっているのは、語の表現形態（漢字）が同じであっても語の意味（対象となる事項の意味範囲）が異なる場合である。

しかし、漢語の置きかえによって生じる問題はそれだけではない。これとは逆に、語の意味がほぼ共通しているために、語の表現形態も同じにしてしまう場合に生じる問題もある。たとえば、〈韓半島〉［ハンバンド］という朝鮮語を「朝鮮半島」ではなく「韓半島」と訳してしまう場合などである。つまり、語の意味がほぼ共通しているからといって同じ漢語で表記して翻訳したことになるのか、という問題である。実はこうした、「意味範囲が等価のものであれば同じ漢字で表記してもよいと錯覚する現象」も「漢字の惑わし」の一種といってよい。本稿は、この問題を中心に考えていく。

Ⅲ　本　論

1　国名の頭文字の並べ方

> 1930年代後半以後、日帝の侵略戦争は中日戦争につづき、太平洋戦争へと拡大した［石渡延男監訳・三橋広夫共訳1998：354］。

冒頭でも述べたように、日本語の文章の中に「中日戦争」ということばが出てきた時に、とまどう日本語話者は少なくないだろう。日本語で「中日」は、「彼岸７日間のまんなかの日、春分・秋分の日」を意味する。大相撲では「本場所15日のうち第８日目」をさす。プロ野球に関心のある人なら「中日ドラゴンズ」という球団名が思い浮かぶかもしれない。

この「中日戦争」は、〈中日戦争〉［チュンイルチョンジェン］という朝鮮語の漢語をそのまま置きかえたもので、「日中戦争」のことである。日本では〈中日戦争〉［ちゅうにちせんそう］という日本語は一般的には使われない。これでは日本語として成立しないからである。したがって、〈愛人〉［エイン］を「恋人」、〈工夫〉［コンブ］を「勉強」と訳すことを当然視する立場からすれば、〈中日戦争〉［チュンイルチョンジェン］は「日中戦争」と訳すことになるだろう。逆に、〈中日戦争〉［チュンイルチョンジェン］を「中日戦争」と訳すのは、〈愛人〉［エイン］を「愛人」、〈工夫〉［コンブ］を「工夫」と訳すのと同じくらいナンセンスだということになる。

これに類似したことばとしては、「韓日関係」、「露日戦争」などがある。

> その実、奇妙な癒着関係を維持している現在の韓日関係の構造こそ、韓国と日本語その克服のために努力すべき対象なのである［朴裕河　2006：230］。

> 露日戦争で勝利した日本は、わが国への侵略を本格的におし進めた［石渡延男監訳・三橋広夫共

訳1998：188]。

いずれも「漢字の惑わし」による漢語の置きかえによって出てきたことばであって、一般的に流通している日本語ではそれぞれ「日韓関係」、「日露戦争」と訳されるはずのものである。日本語では国名の頭文字を並列させる場合に、自国の頭文字を先におく。また、自国を含まない場合でも並列させる順序はほぼ決まっている。たとえば、アメリカと韓国は「米韓」、中国と韓国は「中韓」などである。これらを逆転させた「韓米」、「韓中」などということばはワープロでも漢字変換してくれない。そのようなさかさまの順序に並んだことばは日本語の語彙として存在しないからである。

もちろん、これと同様の仕組みは朝鮮語にもある。したがって、逆に〈日韓関係〉[にっかんかんけい]、〈日露戦争〉[にちろせんそう] という日本語を〈日韓関係〉[イランクヮンゲ]、〈日露戦争〉[イルロチョンジェン] という朝鮮語に訳すのもおかしい。どちらも朝鮮語の語彙としては存在しないことばだからである。朝鮮語として理解されるように訳すならば、〈日韓関係〉[にっかんかんけい] は〈韓日関係〉[ハニルクヮンゲ]、〈日露戦争〉[にちろせんそう] は〈露日戦争〉[ノイルチョンジェン] となるだろう。

2 ほぼ同じ対象事項について異なる漢語を用いる場合

国名の頭文字の並べ方のように、漢字を並べる順序を入れ替えさえすれば何を指しているのか見当がつくような場合もあるが、ほぼ同じ対象事項について、両言語で慣用的／習慣的にまったく異なる漢語をあてている場合もある。

> 7・4南北共同声明は、自主統一、平和統一、民族的大団結の三大原則を宣言したもので、韓半島の平和統一をなしとげるためのものだった［石渡延男監訳・三橋広夫共訳1998：399]。

「韓半島」とは朝鮮語では [ハンバンド] と発音され、〈朝鮮半島〉[ちょうせんはんとう] のことである。その他にも、日韓両国間の領土問題でしばしば登場する〈竹島〉[たけしま] は、朝鮮語では〈独島〉[トクト] といい、〈日本海〉[にほんかい] は〈東海〉[トンヘ] という。

これもやはり「国名の頭文字の並べ方」と同じ問題を含んでいる。これらの場合も、対象事項はほぼ同一と考えられるので、〈韓半島〉[ハンバンド] は〈韓半島〉[かんはんとう] ではなく〈朝鮮半島〉[ちょうせんはんとう]、〈独島〉[トクト] は〈独島〉[どくとう] ではなく〈竹島〉[たけしま]、〈東海〉[トンヘ] は〈東海〉[とうかい] ではなく〈日本海〉[にほんかい] と訳さないと、一般に流通している日本語にはならない。韓国では、日本の海でもないのに「日本海」などという呼称はけしからんという議論もあるようだが、それは的外れと言わなければならない。そんなことを言うなら、日本から見て西側にある海を「東海」などと呼ぶのはけしからんという反論も成立してしまう。日本語では、日本、ロシア、朝鮮、中国に囲まれたあの海のことを「日本海」という名前で呼んでいるだけのことだ。そのような議論は、山にも田んぼにも関係がないのに「山田」などと名乗るのはけしからんというのとあまりちがいがない。

ある事物を何と呼ぼうがそれはその言語の勝手であり（言語の恣意性)、しかもある一部の人々だけにしか理解できないのではなくその社会全体で共通に理解され用いられているのであれば（言語の社会性)、その語はその言語社会の成員の同意なしには変更不可能なのである。ただし、逆に言えば、同意があれば変更可能であるというのも言語の特徴である。したがって、日本語話者の中で「日本海」

ではなく「東海」ということばを使う比率が高くなっていけば、「東海」の方が「正しい」表現だということになる。〈東海〉［トンヘ］という朝鮮語を〈日本海〉［にほんかい］と翻訳する理由は、社会的に合意のあることばを使わなければその言語社会では意味がつうじないからである。後述するように、このように翻訳するのはあくまで日本語という言語の体系を破壊することなく意味を伝えるためであって、特定の政治的立場をあらわそう／あらわさないようにしようとしているためではない。

3　視点の違いがあらわれた表現

歴史上の事件をあらわす名称として〈壬辰倭乱〉［イムジンウェラン］という朝鮮語がある。

> 壬辰倭乱の時、朝鮮は官軍と義兵など全国民が力を合わせて戦ったので倭軍を打ち負かすことができた［石渡延男監訳・三橋広夫共訳1998：204］。

〈壬辰倭乱〉［イムジンウェラン］とは、1592（文禄1）年に豊臣秀吉が朝鮮に攻め込んだ事件のことである。これを日本語では〈文禄の役〉［ぶんろくのえき］、あるいは1597（慶長2）年のものとあわせて〈文禄・慶長の役〉［ぶんろくけいちょうのえき］と一般的にはいう。これも上で述べたのと同じ理由で、「壬辰倭乱」と翻訳すると日本語として意味が通じなくなる。「壬辰倭乱」という語を見ても、朝鮮語の漢語の知識がない日本語話者には、何のことだかさっぱり意味がわからないからである。

ところで、〈倭乱〉［ウェラン］という語には、日本（倭）によって起こされた戦乱、日本による侵略という視点が盛り込まれている。攻め込まれた朝鮮の側からすれば当然の視点だろう。一方、日本では以前この事件を〈朝鮮征伐〉［ちょうせんせいばつ］、〈朝鮮出兵〉［ちょうせんしゅっぺい］などと称することがあった。「征伐」ということばには日本側からの視点が濃厚にあらわれている。〈文禄・慶長の役〉［ぶんろくけいちょうのえき］は、そのような視点を薄めた表現ではあるが、「文禄・慶長」という日本の元号を使うところに日本側の視点が残されている。

1274年と1281年の元寇について、同じく韓国の中の国史教科書では、次のように記述されている。

> 元は日本を征伐するために軍艦の建造、兵糧の供給、兵士の動因を高麗に強要した。こうして二次にわたる高麗・元連合軍の日本遠征が断行されたが、すべて失敗した。［石渡延男監訳・三橋広夫共訳1998：138］

〈征伐〉［チョンボル］ということばには、元からの視点があらわれている。〈日本遠征〉［イルボンウォンジョン］には高麗の視点もあらわれている。しかし、この事件を日本側から見れば〈元寇〉［げんこう］である。「寇」の原意は「他人の家に押し入って害を与える」というもので、そこには侵略を受けたという日本側からの視点があらわれている。

このようにその言語の視点が強く反映された表現の場合、ほぼ同じ対象事項を指し示していても、翻訳する際にそのまま置きかえるだけでは問題が生じる場合がある。逆に「Ⅲ－２」であげた翻訳文の場合、日本で慣用的に用いられている漢語に置きかえて翻訳してもそれほど違和感は生じない。

> しかし日本は日露戦争中に竹島を強制的に彼らの領土に編入してしまった。

> ７・４南北共同声明は、自主統一、平和統一、民族的大団結の三大原則を宣言したもので、朝鮮半島の平和統一をなしとげるためのものだった。

しかし、上の「日本遠征」の部分を「元寇」に置き換えると、

> こうして二次にわたる高麗・元連合軍の元寇が断行されたが、すべて失敗した。

となり、かなりの違和感が生じる。この文章の主体が日本ではなく高麗・元だからである。このように、ほぼ同じ対象事項を指していると思われる場合でも、それぞれの言語からの視点が反映されている表現の場合の翻訳は簡単ではない。

朝鮮語の視点があらわれたことばとしては、他に〈解放後〉[ヘバンフ]がある。韓国では1945年8月15日を日本の植民地支配から解放された日と考えて、これより後の時期を〈解放後〉[ヘバンフ]と呼んでいる。しかし、これもそのまま日本語に移して「解放後」と訳してしまうと、まったく意味不明のことばになる。日本語では、「解放」は歴史上の出来事を示すことばではなく、一般的な意味をもつことばでしかないからである。

下に掲げた文章は、ハングルのみで書かれていたものであるが、漢語の部分だけを機械的に漢字に置きかえたものである。その下に、筆者の試訳を示した。

> 特히 解放後의 韓國社會教育은 政治的 目的이나 政權的次元에서 强力한 官主導型으로 되었던 点이 많았다.（[ナムグン＝ヨングォン1995：627-628] を改変）

> 特に解放後の韓国社会教育は政治的目的や政権的次元で強力な官主導型になっていた点が多かった。

さて、日本語では、〈解放後〉[ヘバンフ]に対応することばとして、〈戦後〉[せんご]ということばが思い浮かぶ。日本では1945年 8 月15日をアジア太平洋戦争が終わった／に敗れたことを「終戦」／「敗戦」と表現し、それより後の時期を〈戦後〉[せんご]という。確かにこれらのことばが指し示す対象の時期は同一である。しかし、〈解放後〉[ヘバンフ]を機械的に〈戦後〉[せんご]と置きかえて訳すと問題が生じる。それは、対象事項がほぼ同じであっても、視点が異なるからである。先程の試訳文の「解放後」を「戦後」に置きかえると以下のようである。

> 特に戦後の韓国の社会教育は政治的目的や政権的次元で強力な官主導型になっていた点が多かった。

先に、「日本遠征」を「元寇」と置きかえて訳した際に生じたのと同じ問題がここにはあらわれている。この文章の主題は日本ではなく韓国の社会教育である。一方「戦後」という日本語には、「日本の終戦後／敗戦後」という視点が含まれている。つまり、日本語話者がこの翻訳文を読むときには、「日本の終戦後／敗戦後の韓国の社会教育は・・・」という視点から読んでしまい、違和感をもつのである。それは「韓国の社会教育」という部分に、何の関係も無い「日本の終戦後／敗戦後」という修飾語がついているからである。

あるいは、韓国が主題になっている文章であるから「韓国の戦後」というニュアンスで読むことも可能であるし、そのように読む日本語話者も少なくないだろう。この場合、「韓国の戦後」が何を指すのかということが問題になる。アジア太平洋戦争は、大韓民国という国家として戦った戦争ではないので、「1945年8月15日後」という意味にはなりにくい。むしろ朝鮮戦争の休戦後というようにとら

えるほうが文脈上は自然かもしれない。しかし、そうなればこの文の意味はまったくちがったものになってしまう。

ここでは、〈露日戦争〉［ノイルチョンジェン］、〈独島〉［トクト］、〈韓半島〉［ハンバンド］などを、朝鮮語の視点が強くあらわれた表現ではないので、それぞれ「日露戦争」、「竹島」、「朝鮮半島」と訳してもあまり違和感はない、と述べたが、厳密に言えば程度の濃淡はあっても違和感はあるはずである。つまり、単語の入れ替えによって生じる違和感の程度はグラデーションのように連なっていて、あまり違和感をもたれない「露日戦争→日露戦争」という入れ替えから、非常に違和感をもたれる「解放後→戦後」という入れ替えに至るまで、さまざまな段階があると推測できるのである。この問題については、多くの事例をとりあげた量的な分析を通して考察しなければならないので、それができない本稿では問題の存在を指摘するにとどめる。

4　漢語の置きかえによる翻訳は無意味か

では、漢語の置きかえによる翻訳はまったく無意味なのだろうか。たとえば、朝鮮語の論理や主体性を尊重して、あえて〈韓日〉［ハニル］を「韓日」と訳すのだという考え方があるかもしれない。しかし、日本語を書くときに異言語の論理や主体性を尊重していたら、日本語の論理や主体性はどうなってしまうのか。それ以前に、異言語の論理や主体性を尊重した表現では、日本語として意味が通じない。「中日戦争」と言われれば、中日ドラゴンズを含むプロ野球の球団同士の熾烈な優勝争いを比喩的に表現したものと、とらえられてしまうかもしれない。これでは日本語として意味をなさない、という指摘はすでに繰り返し行ってきたとおりである。

それとは別に、朝鮮語という異言語による観点をあえて示すという考え方もありうる。これは、異言語の論理や主体性を尊重するという考え方とはまったく異なる。この考え方は、直訳か意訳かという、翻訳に関する議論でしばしば問題になることと並行して論じることができる。

たとえばタミル語には、直訳すれば「恋人同士が冷たい眼差しで見つめあった」という表現があるという。直訳されたこの日本語だけを読めば、恋人同士がけんかでも始める場面かと思われてしまいそうだが、「恋人同士が熱い眼差しで見つめあった」と意訳する方が原文の実際の意味に近い。暑い気候の中で生活している人々の観点では、恋人同士の高まる感情をあらわす時に、「冷たい」という形容詞がもっとも適切と考えられるのである。しかし、タミル語の論理や主体性を尊重して、直訳すれば日本語として成立しないか、まったく原文の意味とはかけ離れた意味を読者に伝えてしまう。しかし、逆に意訳するだけではタミル語という異言語による観点、文化的背景などがまったく見えなくなってしまう。こうした問題について三枝壽勝は「韓国語からの翻訳」という論文において以下のように述べている。

> 翻訳に異質な言語の使用者による異質な発想法を日本語の世界に紹介する役目があるとすれば、その翻訳の文体が自然な日本語でなくてもよい可能性もありうる。不自然な日本語に対する違和感をきっかけにして異質な発想をする他者の存在にきづかせるという役割もありうるのである。［三枝壽勝　1999：24］

この論文では「直訳」、「意訳」ということばは使われていないが、「不自然な日本語」が「直訳」された日本語に、「自然な日本語」が「意訳」された日本語に、それぞれ対応しているとみることが

できる。歴史用語であるという点で一般名詞とは異なる点があるものの、三枝のような考え方にたてば、さきほどの「中日戦争」についても、「朝鮮語では日本の頭文字よりも中国の頭文字を先に並べるんだなあ」というように異言語である朝鮮語の発想に触れることができるし、さらには「そういえば日本語でも「韓米」ではなくて「米韓」という順に並べるよな」というように自言語の発想を客体化してながめることにつながる可能性がある。

ただし、その場合は翻訳された日本語文を読む読者に対する丁寧な説明や但し書きが必要であることは言うまでもない。たとえば、以下のようなものである。

> 中日戦争：「日中戦争」のこと。朝鮮語における国名の頭文字の慣用的な並べ順は、中国が先で日本が後になる。日本語においても「韓米」という並べ順は慣用的でなく「米韓」という並べ順が慣用的であることを想起すればよい。

以上、述べてきたように、漢語の置きかえによる翻訳はまったく無意味であるというわけではない。しかし、朝鮮語の論理や主体性を尊重して行う場合と、「直訳」の効果をあらわすために行う場合とではまったく意味が異なる。以下では、このちがいを明確に理解するために、ひとつの新聞記事をとりあげて論じる。

5　朝鮮語の論理と主体性に影響を受けた日本語

ここでは、鄭在貞「日本の敗北が一変させた秩序」『朝日新聞』2007年10月２日朝刊　という記事とそれに書き加えられた「注」を資料としながら、漢語の置きかえによる翻訳がもつ問題点について考えてみる。この記事は、「聞き手・吉沢龍彦」という記者が、ソウル市立大教授である鄭在貞という人物が朝鮮語で発言した内容を日本語で記事にまとめたもののようである。この中には、本稿でも繰り返し指摘した、漢語の置きかえによる訳語がいくつも出てくる。

> 1937年の<u>中日戦争</u>から45年の日本敗北まで〔……〕
> <u>清日戦争</u>における日本の勝利は、〔……〕
> <u>韓半島</u>に大韓帝国ができて、〔……〕
> <u>露日戦争</u>では、帝国日本が勝利した影響で大韓帝国が滅ぼされ、〔……〕
> 米ソ対立という新秩序のもとで起きた韓半島の<u>南北（韓国）戦争</u>は、〔……〕

これに対して以下のような注がつけられている。

> 「清日戦争」「韓半島」「露日戦争」「南北戦争」は、日本では「日清戦争」「朝鮮半島」「日露戦争」「朝鮮戦争」と呼びますが、<u>いずれも発言のままとしました</u>。

ここで問題になるのは、最後の「いずれも発言のままとしました」という部分である。これを文字通りに受け止めるならば、この部分だけ日本語への翻訳を放棄したということになる。つまり、上のような翻訳の仕方は、“I go to the school with Mike on Monday.” という英語を「私はMondayにMikeといっしょにschoolに行きます。」と訳すのと平行して考えることができる。この日本語訳文を見て、①英語の知識がある人であれば「わたしは、マンデーにマイクといっしょにスクールにいきます」というように音読しながら、さらにその正確な意味も理解するだろう。また②ローマ字の読み方しかわからない人であれば、「わたしは、モンダイにミケといっしょにスチョールに行きます」というよう

に音読することはできるが、意味は理解できないだろう。

同様に「露日戦争では、」という日本語訳文を、①朝鮮語の知識がある人であれば「ノイルチョンジェンでは、」というように音読しながら、さらにその正確な意味も理解するだろう。また②日本語としての漢字の読み方しかわからない人であれば、「ろにちせんそうでは、」というように音読することはできるが、なじみのない用語にとまどうだろう。そしてこの記事の読者であれば、下の注を見て「日露戦争」のことだと理解する、という順序をとるだろう。

両者の違いは、以下のような点である。前者は日本語訳文の中に漢字・ひらがな・カタカナという、通常の日本語表記に用いるものとは異なるローマ字という文字表記を使っているために、その部分だけが日本語ではない言語（つまり英語）であるということに気づきやすい。後者は日本語訳文の中に漢字という、通常の日本語表記に用いるものと同じものに見える文字表記を使っているために、その部分だけが日本語ではない言語（つまり朝鮮語）であるということに気づきにくい。ここに、「漢字の惑わし」効果があらわれているのである。もう少しわかりやすく言えば、以下に示すように、後者は本来「露日戦争では、」と表記するのではなく「노일전쟁では、」あるいは「ノイルチョンジェンでは、」と表記されるはずのものだということなのである。

1937年のチュンイルチョンジェンから45年の日本敗北まで〔……〕
チョンイルチョンジェンにおける日本の勝利は、〔……〕
ハンバンドに大韓帝国ができて、〔……〕
ノイルチョンジェンでは、帝国日本が勝利した影響で大韓帝国が滅ぼされ、〔……〕
米ソ対立という新秩序のもとで起きたハンバンドのナンブク（ハングク） チョンジェンは、〔……〕

このように記事が表記されていれば、下線の部分を「不自然な日本語」としてとらえることなく、「日本語ではない言語」で表記されているのだというように、読者は明確に理解できる。実際、人名などの固有名詞の場合には、このような表記がしばしばなされる。〈金大中〉［キムデジュン］という朝鮮語による人名を「キム・デジュン」と表記する場合などである。このような表記をした上で下のような注を加えれば、スムーズに記事の内容を理解することができる。

「チュンイル戦争」「チョンイル戦争」「ハン半島」「ノイル戦争」「ナンブク戦争」は、日本では「日中戦争」「日清戦争」「朝鮮半島」「日露戦争」「朝鮮戦争」と呼びますが、いずれも発言のままとしました。

この記事の筆者はおそらく無意識的に、「漢字の惑わし」を効果的に利用し外国語であるはずの朝鮮語のことばをまるで日本語であるかのように表記することによって、日本語という言語の体系を破壊してしまっているのである。

前述したように、「異言語である朝鮮語の発想に触れる」という機会を提供しようという意図があるのであれば、少なくとも以下のように「振り漢字」をつけるなど、配慮のある表記が必要になってくるだろう。

1937年のチュンイルチョンジェン（中日戦争）から45年の日本敗北まで〔……〕
チョンイルチョンジェン（清日戦争）における日本の勝利は、〔……〕
ハンバンド（韓半島）に大韓帝国ができて、〔……〕

ノイルチョンジェン（露日戦争）では、帝国日本が勝利した影響で大韓帝国が滅ぼされ、〔……〕米ソ対立という新秩序のもとで起きたハンバンド（韓半島）のナンブク（ハングク）チョンジェン（南北（韓国）戦争）は、〔……〕

その上で、以下のような注を付け加えれば、日本語という言語の体系を破壊することなく、「異言語である朝鮮語の発想に触れる」という機会を提供することができるのである。

「チュンイルチョンジェン（中日戦争）」「チョンイルチョンジェン（清日戦争）」「ハンバンド（韓半島）」「ノイルチョンジェン（露日戦争）」「ナンブクチョンジェン（南北戦争）」は、日本では「日中戦争」「日清戦争」「朝鮮半島」「日露戦争」「朝鮮戦争」と呼びますが、いずれも発言のままとしました。

6　政治的な判断の介入

上で紹介した記事には、もうひとつ重大な問題点がある。この記事では、上で示した4種類の朝鮮語漢語だけがそのままの形で日本語として置きかえられていたが、実はそれ以外の朝鮮語漢語は日本語として置きかえられていない。

東アジア地域全体に与えた影響を考えて〔……〕
アメリカとも戦火を交えて〔……〕

元の鄭氏の朝鮮語による発言を直接聞いていないので断言はできないが、下線の部分は、それぞれ「아세아」［アセア］、「미국」［ミグク］という朝鮮語だった可能性がある。これらも実は漢語で、それぞれ「亞細亞」、「美國」と表記できる。それなのになぜ、これらの漢語だけは「亜細亜」、「美国」と訳さなかったのだろうか。

先の英語の例で言えば、“I go to the school with Mike on Monday.” という英語を「私はMondayにMikeといっしょにschoolに行きます。」と訳したときに、なぜ‘I’や‘go’も同じように置きかえて「IはMondayにMikeといっしょにschoolにgoします。」と訳さなかったのか、という問題と重なる。

つまり、この記事の筆者は恣意的に、ある漢語はそのまま置きかえて不自然な日本語に翻訳し、ある漢語は日本語として自然な表現に置きかえて翻訳したということになる。その基準は極めて政治的なものであることが推測できる。しかも、多くの訳者が無意識のうちにその基準にしたがって訳しているように思われる。

この基準については、多くの事例を集めて統計的に処理することによって、その傾向をつかむことができる。そうした作業によって、どのような思想的背景をもった訳者が、朝鮮語の論理と主体性に影響を受けた訳語を多く使用する傾向にあるのか、という関係性が明らかになるかもしれない。本稿の筆者は、おそらく、日本による朝鮮植民地支配を批判し反省するという立場にある訳者がそのような訳語を多く使う傾向にあるのではないか、逆に植民地支配を正当化する立場にある訳者はそのような訳語をあまり使っていないのではないか、と推測している。

事例分析としてはもうひとつ、日本語が朝鮮語に訳される際にも同様の現象が起きているのかどうかも明らかにする必要がある。つまり、〈日清戦争〉［にっしんせんそう］という日本語が、〈日清戦争〉［イルチョンチョンジェン］という日本語の論理と主体性に影響を受けた不自然な朝鮮語に翻訳されるのか、〈清日戦争〉［チョンイルチョンジェン］という自然な朝鮮語に翻訳されるのか、という問

題である。本稿の筆者は、日本語の論理と主体性に影響を受けた訳語はあまり多く使われていないのではないかと推測する。なぜなら、韓国では思想的背景の左右を問わず、日本による朝鮮支配を当然視するケースはまれで、それを批判する立場がほとんどだからである。もちろんこれについても厳密な調査と分析にもとづいた考察が必要であることは言うまでもない。

おわりに

ある言語からある言語への翻訳は可能である、というのが多くの人々の頭の中にある漠然とした思いであろう。しかし、本稿で論じてきたように、たったひとつの単語の翻訳にさえも多くのイデオロギーや問題がまとわりついているのが現実である。

最後に、筆者の主張がどこにあるのかを明確に示しておきたい。筆者は、朝鮮語の論理や主体性を無視せよと主張しているのではない。朝鮮語の論理や主体性に影響を受けた訳語を批判してきたのである。言いかえれば、日本語の体系を破壊するような訳語を批判してきたのである。そのような訳語を使うことが朝鮮語の論理や主体性を尊重することになるのだ、という考え方を批判してきたのである。「朝鮮語の論理や主体性に影響を受けた」態度には日本語使用者としての主体性が欠けている。「朝鮮語の論理や主体性を尊重する」態度とは、日本語使用者としての主体性をもって朝鮮語を日本語に翻訳する態度である。筆者が妄想する理想的な翻訳とは、「朝鮮語の論理や主体性を尊重しつつ、しかも日本語の体系を破壊しないようなもの」である。これについては、非常に不十分なものではあるが「4　漢語の置きかえによる翻訳は無意味か」で若干の提案をした。

とは言え、「朝鮮語の論理や主体性を尊重しつつ、しかも日本語の体系を破壊しないような」翻訳という考え方は非常に抽象的であって、具体的な翻訳の場面でどのようにすればよいのかの答を与えるものにはなっていない。本論の中でも繰り返し指摘してきたように、多くの翻訳の事例を集めて分析する作業を通して、朝鮮語の視点の濃淡、日本語の体系を破壊する度合いなども明らかにしていく必要があるだろう。

参照文献（日本語）

石渡延男（監訳）・三橋広夫（共訳）：1998　『入門韓国の歴史－国定韓国中国史教科書』明石書店
井上京子：1999　「文化にかかわる翻訳の可能性と限界」『日本語学』18：33－43
植田晃次：2002　「言語呼称の社会性－日本語で朝鮮語、韓国語、ハングルあるいは･･･と呼ばれる言語の呼称再考」『社会言語学』Ⅱ：1－20
風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健：2004　『言語学』(第2版) 東京大学出版会
三枝壽勝：1999　「韓国語からの翻訳」『日本語学』18：14－24
田中克彦：1996　『名前と人間』岩波新書
朴裕河：2006　『和解のために』平凡社
柳父章：1982　『翻訳語成立事情』岩波新書
山本真弓編：2004　『言語的近代を超えて』明石書店

参照文献（韓国語）

국사편찬위원회（国史編纂委員会）編：1997『중학교국사（하）』（『中学校　国史（下）』）
남궁용권 ：1995「사회교육（社会教育）」『한국　근현대　교육사(韓国近現代教育史）』안귀덕, 이상금, 조연순, 유봉호, 이길상, 한기언, 이원호, 김영우,　남궁용권,정세화(共著)、587－650、한국정신문화연구원（韓国精神文化研究院）.